

こんなん しています。

わだいのつじかん

田植えの季節

郊外を行くと、新しい家々の間にも、田に水が張られ新しい苗が植ええられ始めています。夜ともなれば力エルの声が盛んに聞こえる季節。最近まで水田地帯だった名残のような生命の声です。

先日聞いた歌声が頭の中に繰り返し浮かびました。

田んぼでお米を作りましょ
自分の食べる分くらい

耕し、水張り、畝を塗り、苗を一直線に植えましょ

紀美野町の四方を山に

囲まれた山村、真国地区にある、りら創造芸術高等専修学校の先生と生徒さんが作った歌です(作詞/岡村智香・弓庭規生、作曲/弓庭規生)。歌は3番まであり、水抜き、中干し、草を引き・・・と農作業の手順を軽やかに歌っています。真国御田の伝承活動の一環として生まれたとのこと。すまぐ育てた苗を田んぼに植えると農家の人の仕事は八分かつた終わつたというほど。水をたたえ、田んぼが一面に空を映し出す今頃の風景は、農家の人の、ほっと一息ついた一段落の光景なのです。そんな風景も、田をつぐ

田んぼでお米を作りましょ

し、住宅やコンビニや大型スーパーになり、すっかり空間が狭くなりました。また、農山村では耕作されないう荒れた田んぼが目立つようになっています。

耕作放棄地

耕作放棄地とは、もう耕作しない、という農家の意志を表す「捨てられた田んぼ」です。日本全体で耕作



田植え実習(和歌山市梅原)

放棄地は農地面積の10%以上にもなっています。和歌山県では、約3万5000畝の耕地面積に対し耕作放棄地は4228畝と約12%(2010年)。近年は、毎年平均1700畝もの耕作放棄地が報告されています。米作りが経済性に見合わなくなり、新規農業者は増えず、農家は年齢を重ね棄農の決断をせざるを得なくなつたのです。

増え続ける耕作放棄地対策に国が打ち出したのは「農地を効率的に集約整備し、意欲ある就農者に貸し出し、産業として成り立つ大型化した競争力ある農業を目指す」というもの。事業初年度の2

014年に和歌山県の実績は11畝。国が和歌山県に求めた目標の1%でした。この事業を検討する地区会議に出たことがありますが、「集約整備をしないと地区の将来はない」という声とともに、「段差のある狭い農地も工夫して作ってきた今までの農業はどうなるんだ」など戸惑いの声もありました。和歌山県の多くの農業地域では、もともと大きな経済を指した稲作ではなかったから、効率的な大規模農業へのリアリティーがないのです。

経済性重視のためには、水と土とお日様と対話し、米粒を愛でた小さな喜びを捨てなくてはならない。ご先祖が守つたうちの田んぼはどうなるんだ...。踏ん切りがつかないのは、自分の食べる分くらい作ってきた農業との決別だからではないでしょうか。



田植え綱を張る

生物多様性や多面的機能の言葉を持ち出さないと田のアイデンティティーが不明にもなってきました。経済性も環境問題も、風景に関する叙情性もいったん横に置き、作ることは食べる、食べることは生きること、この基本を忘れてきたことが、現在の混乱する農業を生み出したともいえます。

明日は田植え。学生ともども田に入り、作る、食べる、生きる力を思い出したい。平成も7、8年生まれの子にはどう伝わるでしょうか。

プロフィール



湯崎真梨子(ゆざき まりこ)
和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。